

## 『私のふるさと 宮城県塩釜市』

生まれは宮城県の塩釜市だが、実際に私がそこに住んだのは小学校の3年までである。だが、その後も折にふれて塩釜や父親の生家がある隣町の七ヶ浜を訪れて海を見るたびに、「帰ってきた」という気分になった。「遠くにありて思う」という意味も含めて、松島湾の海辺はやはり私のふるさとだ。

塩釜は松島湾の一番奥まったところに位置しており、水産の町である。子供のころは、街全体に魚の臭いが染みついていた。魚市場を中心に、水産加工業、造船業、漁具・水産加工用器具を商う店などが軒を連ね、また、漁船員たちのための飲み屋などで街は活気に満ちていた。戦後間もないころは、魚はとくに貴重な栄養源で、疎開先から帰ってきた人や復員兵など、街は人であふれていた。今はご他聞に漏れず過疎化の波に洗われ、松島観光の遊覧船の乗り場と塩釜神社に人が集まるだけの静かな街になった。

4年前の東日本大震災の津波は松島湾沿岸の町に大きな被害をもたらした。だが、塩釜は湾内の多くの島が自然の防波堤となり、押し寄せる津波は緩やかで、犠牲者の数も建物の被害も少なかった。ただ、七ヶ浜を含め湾口に近い浜辺にはいまだに津波の爪痕が痛々しく残っている。



震災前の七ヶ浜の風景

ところで、塩釜から5キロほど山側に多賀城の遺跡がある。松尾芭蕉は仙台市の北部で本道である「奥大道(おくたいどう)」から分かれて多賀城へ通じる枝道、「奥細道(おくのほそみち)」を通過して多賀城を訪れた。その時に彼が見たのは有名な「壺の碑(いしぶみ)」だけだったが、昭和40年代初めから本格化した発掘調査の結果、多賀城は太宰府に匹敵する古代都市だったことが明らかになった。昨年秋、私は初めて遺跡を見たが、その規模の大きさに驚いた。政庁や高い塔を持つ寺院などを中心に、城下は、今でいう都市計画に基づいた街づくりがなされていた。それには渡来人の力が与って大きかったという。陸奥一ノ宮である塩釜神社も、陸奥全域の統治機能を担う多賀城の人々の精神的な支えだった。また、塩釜浦と呼ばれていた塩釜の湊に通じる道や、七ヶ浜に通じる運河の跡などが確認されており、古代は一帯が多賀城文化圏だったといえる。

多賀城遺跡を見た後の私の「ふるさと観」は、昭和20年代の「魚臭い街」から一気に「古代都市文化圏」へと時代をさかのぼった。

その古代都市も西暦869年(貞観11年)の貞観三陸大地震に見舞われた。この地震は東日本大地震に匹敵する強さだったようで、津波が多賀城の城下に達したという記

録もある。また、松島の美しい景観はこの地震で海が入り込んで生まれたともいう。

地震や津波などの自然災害とそれを克服する人々の営み、さらには異国や中央からもたらされる新しい文化などが、長い時間の中でその主役を替えつつ、現在の松島湾沿岸の風土を形作ってきた。ただ海の恵みと潮の匂いは今も昔のままである。

平成27年1月 鈴木 恒男